

フィンランドの子どもを取り巻く社会環境

ーヘルシンキ市, エスポー市, タンペレ市の教育・福祉・地域の現場からー

仲本美央[※], 山本房代^{※※}
稲垣美加子[※], 八田和子^{※※※}

I. はじめに

フィンランドは、2000年以降からOECD（経済協力開発機構）が実施しているPISA調査（学習到達度調査）の2000年と2003年の「読解力」テストで連続第1位、2006年に第2位、2009年に第3位を獲得している国である。このことがきっかけとなり、世界からフィンランドの教育が注目されることになり、日本のみならず、これまで世界の多くの教育者・研究者がフィンランドの教育を調査し、文献や研究会でその教育方法が紹介されてきた。それらの調査結果から、「読解力」テストが好成績であった要因を、教育制度やそれに伴った教育方法のみならず、フィンランドの社会生活や教師の質の高さ、成人教育、平等教育の追求、個別化の教育等多くの側面から取り上げられている。また、福祉分野においても子どもにやさしい社会づくりを目指す国家として、社会ニーズに即したフィンランドの家族対策も世界が着目する点の一つとなり、これらについても多くの教育・研究関係者が現地を訪問し、その効果的な社会システムが報告されている。

筆者である仲本・稲垣・八田は、平成22年8月22日から27日にかけて、フィンランドのヘルシンキ、エスポー、タンペレの3都市にある教育や福祉や地域の施設を訪問し、現地の研究者、教育者、専門家にフィンランドの教育と福祉についてのインタビューや現地に在住する人との交流を得ることができた。本稿は、これらの体験と現地で入手した情報・資料をもとにフィンランドの子どもを取り巻く社会環境を報告するものである。さらには、現地ヘルシンキ大学に留学しながら、現地の小・中学校にて特別支援教育の調査研究を実施している山本が、フィンランドの特別支援教育について報告する。これらの報告とともにフィンランドの子どもを取り巻く社会環境の動向について、生活・政治・教育・保育等の社会背景を含

[※]総合福祉学部 准教授, ^{※※}大阪大学大学院 修士課程,

^{※※※}コミュニティ政策学部 准教授

めながら考察していきたい。

Ⅱ. ヘルシンキ大学 (University of Helsinki/Helsingin yliopisto)

フィンランド国内の大学として最古にして最大であるヘルシンキ大学は、フィンランドの大都市ヘルシンキの中心部に1640年に創立され、9つの学部には40,000人以上の教職員と学生が在籍している。英語で教育を受けることが可能な神学、法学、薬学、芸術、自然科学、教育、社会科学、農学、林学、獣医学などの学部も存在する。授業料は基本的に無料。留学生の割合は少ないものの留学生専門対応のセンターも存在する(以上、ヘルシンキ大学公式ホームページより¹⁾)。

1. 充実した教育環境

筆者らは、ヘルシンキ大学行動科学部教師教育学科メディア教育研究グループに研究員として赴任し、メディア教育のあり方について研究する大橋裕太郎氏と同大学に留学中の大阪大学大学院山本房代氏のもとへ訪問し、大学内の施設見学とフィンランドの社会状況のインタビューを行った。

大学には、4つのキャンパス内に4つの図書館が存在する。このうち、市民会館キャンパスの図書館を見学した。図書館内には神学、法学、芸術学、教育学、社会科学の文献が所蔵されていた。教育学の分野では、教員養成課程の資料として教育教材(写真1)や各種業者の教科書(写真2)も所蔵されていた。メディア教育を研究する大橋氏によれば、フィンランドは教科書に対する国による検定は存在しないという²⁾。大学内に所蔵された各業者の教科書は、どの会社を比べてもデザイン性が高く、写真や絵が多く使用されている。さらに、フィンランドの教育教材の特徴は後述する小学校や図書館での取り組みでも触れるが、楽しみながら学ぶことを第一においた多種多様な教材・教具が使用されている。その教材・教具の内



写真1 フィンランドの教材・教具



写真2 フィンランドの教科書



写真3 ヘルシンキ大学の保育ルーム



写真4 様々な種類の木の实等の材料

容は日本の双六のようであったり、数字並べであったり、文字遊びのカルタのようであったりする事、ゲーム遊びを連想させるものである。日本の保育においては、幼稚園教育要領にも示されるように「遊び」＝「学び」という概念のもとに幼児期の重要なこととして遊びを十分に味わい、保育者からの援助のもとに学びを深めていくことを重要としているが、フィンランドでは保育所での乳幼児期だけでなく、小学校に入ってもこのような教材・教具を使用して、楽しむ遊びの感覚を有しながら算数の基礎思考力を育む学習を実施している。幼児期に大切である「楽しみながら遊び、学ぶ」過程を児童期においても接続していく過程がそこには存在する。子どもにとって、「学び」は楽しむこととして取り組まれる教育過程の一面がある。

さらに、大学内の教育学部が模擬保育等で使用する保育ルーム（写真3）も見学した。保育ルームには、隣接した観察室が設けられ、マジックミラー越しに子どもを保育する様子や実験の被験者を観察することができる構造となっている。ルーム内には様々な種類の木の实（写真4）や毛糸、紙類等の遊びに利用する材料や遊具が保管され、実際の保育室のようなスペース内に設置されている。実際に、大学で学ぶ学生はこの保育ルームを利用し、実践的な授業や研究の実験を行っている。

2. フィンランドの子育て政策の特徴と背景

調査内容に入る前に、子育て政策について概観しておきたい。男性だけでなく、女性の社会進出率の高いフィンランド（フィンランドの女性のパート労働は10%程度ほどで7歳以下の子どもを持つ女性でも4分の3がフルタイムで働いている³⁾）においては、社会的に出産と育児手当などへの児童・家庭制度が歴史的に十分確立してきた経緯があった。1960年代までのフィンランドでは、父親は外で働き、母親は家庭を守るという性別役割分業意識と家庭状況であったが、その後の経済の変動や総人口の減少といった社会変化から女性の社会進出

を支援せざるをえなくなっていく⁴⁾。その結果、1964年に母親休業制度、1973年には自治体保育法が成立し、子育てと仕事の両立のための環境整備が進められる。その後、休業制度については、1976年に父親休業制度が加わり、さらに1985年に母親・父親・両親休業制度へと変化する。自治体保育法も、1985年に3歳未満児の自治体保育への主体的権利が保障され、1996年にはその主体的権利を7歳未満児童まで拡大している。また、各種手当や給付のような子どもへの現金給付の家族政策についても、歴史的に一部手当の引き下げはあったものの各種多様な法制度が投じられてきた。

政治における特徴点の一つとして、フィンランドは、政治の中央から制度が降りてくるトップダウン方式ではなく、ボトムアップ方式で組織が成り立っているため、何よりも社会の中での現場を重視し、それぞれの場で働く人、生活する人たちの自主性や主体性を支える形で改革が行われてきた。さらに、働き、生活する場所だけではなく、政治においても男性と女性が平等に共同参画の状況があり、2008年当時の大臣の半分以上は、女性であった(堀内、2008)。2003年には、初の女性首相が誕生し、2010年6月、フィンランドの首相・大統領とも女性が選出されている⁵⁾。このような女性の社会進出を背景とした政治の歴史的な展開によって、子どもと家庭に優しい社会づくりが目指されてきたことと考えられる。

フィンランド在住1年弱の大橋氏と2年弱の山本氏にフィンランドの国の様子をインタビューしたところによると、子どもに関係する国内制度の成立や教育・福祉のサービス措置に関しては最優先の社会であるという。また、子どもへの社会的な責任については、国・家庭のみならず民間の企業も負うことが当たり前の意識で成り立っている。企業は家庭での育児時間を保障していくため、子どもの保育園の閉園までには終業時間を迎えるところも多く、父親が保育園に迎えに行くことが日常の姿としてある(父親の育児参加に関しては、VI. タンペレ中央図書館・サンボラ図書館でも詳細に述べる)。

Ⅲ. ホスマリ公園小学校・保育所

(Hösmärinpuisto school and daycare centre/Hösmärinpuiston pienten lasten Kouluja pääräkoti)

1. ヨーロッパで一番大きな木造建築(写真5)

ホスマリ公園保育所・小学校はヘルシンキ市より20km離れたのエスポー市内にある。保育所には0～6歳、小学校には9歳以下の子どもたちが通い、3年生以上になると近くにある別の校舎に通うこととなる。このような保育所と小学校低学年までの継続的教育の実施には、9歳までの学年は現行の学校システムにはまだ早い年齢であるとの考え方が基本にある。エスポー市ではこの学校の他、一校がこのシステムを導入している。エスポー市以外の地域でもこのようなシステムを取り組んでいるところもあるが、その数は少なくなっている。2005年に建築家



写真5 ホスマリ公園小学校

ウィルト＝スウォントによって建設された校舎はヨーロッパでも一番大きな木造の校舎で、世界的にも着目され1年中国内外から見学者が訪れるという。寒い国フィンランドでは暖房が必要な時期が長いので、暖房や湯沸かしのエネルギーはすべてソーラーパワーとなっている。

2. ホスマリ公園小学校の施設見学とフィンランドの教育事情

筆者らは、ホスマリ公園小学校の校長マージャット＝テンカネン氏に校内の施設見学とフィンランドの教育事情についてのインタビューを行った。

夏休み明け一週間の校内では、すでに各教室で小グループの授業が始められていた。教室のように区切られた空間もあるが、通路続きの場所に机とイスを並べ、教師の話を聴く子どもたちの姿も見られ、校内全体が生活空間のスタイルとなっている。食堂は全校の生徒で食事ができる空間（写真6）となっており、昼食のみならず朝食（有料）も7:30から用意されている。また、希望次第で夕食（有料）も用意される。これは保育所でも同様の対応である。フィンランドでは、朝食を家庭で食べないで通学する子どもの状況が大きな問題になっているという。エスポー市はフィンランドの他市に比べて18歳以下の若い人の割合が多く、ヘルシンキ近郊圏ということもあり、働きながら子育てする若い世帯が住居を求めるケースが多い。共働き世代の中で、70%以上が保育所利用者であるという。そのような子育てをするフィンランドの共働き家庭における食への意識は低迷化し、都市部では家庭で食事を作らないことも稀ではない。2006年に正保らが実施したフィンランドボリ市の保育施設の保護者に対する家事・育児の調査によれば、朝食摂取状況について「あまり食べない」「食べる日と食べない日がある」を合計すると全体の26%に上るという結果であった（正保ら、2008）。フィンランドの学校給食は多彩でバランスが取れている。ホスマリ公園小学校でもメニューはバイキング形式（写真7）で食べ物を選び、量も自分で決め、多様で異なる宗教観も持つ家庭の子どももいるため、ベジタリアン用の給食も用意され、おやつも希望すれば提供してもら



写真6 食堂



写真7 バイキング形式の給食

写真8 相談し合う行政職員のトゥオミ氏と
保健師のムッコネン氏

える。学校給食は国の政策としても重要な部分として認識されている (Lindroos, 2006) が、国の手厚い対策があるほど、家庭の食に対する育児の低下に繋がっていることがあるのかもしれない。フィンランドの育児にとって大きな課題となっていることは否めない。

校内保健室には、保健師であるパイビプーッコ=ムッコネン氏が週2回在申し、年間において子どもの精神面、身体面での健康チェックを行っている。その他、教員以外に子どもへ対応する専門職には、週1回ソーシャルワーカー、週1回心理カウンセラー、必要な際には医師にも訪問してもらうようにしている。春と秋には定期検診が行われるが、日々の問題として多く上げられるのは、身体的な健康面での問題とともに、時に経済的な問題から派生したネグレクトの問題が上げられる。これら多くの問題に関しては、学校だけではなく、行政の職員に報告しながら地域全体で連携して子どもの支援を実施している。筆者らが訪問した時にも、行政の職員であるレーナ=トゥオミ氏が来校し、ムッコネン氏の報告を受けながら今後の対応について相談し合っていた (写真8)。エスポー市では、行政の職員が学校を訪問するシステムを戦後から取り入れているとのことであった。

校内には1, 2年生のクラスだけでなく、就学前教育機関としてプレスクール（フィンランドではエシコウル）も存在する。このプレスクールの取り組みに関しては、日本でも多くの研究論文や文献で取り上げられ、幼児期から児童期の接続について重要なこととして捉える国の教育政策を理解することができる。この政策は、義務ではなく保護者が希望するシステムだが、ほとんどの子どもがこのシステムを利用する（安藤, 2007）。ここでは、単なる接続していくための1年の期間を設けるだけではなく、「遊びの中で学ぶ」から「教科を学ぶ」ための保育・教育計画や内容、デイリープログラム、対象年齢への工夫が織り込まれていた。ホスマリ公園小学校では、小学校に上がるための対象年齢に関しては、深い教育支援が行われ、一年間のプレスクール期間に教育的な側面だけでなく、精神的発達や日常生活動作などにおける社会性の側面についても観察記録が取られ、個々の子どもの書類での記録も残されていく。これらの記録とともに、クリスマスの時期から小学校入学前の春までにおいてどれくらいの学習ができるかのテストを実施する。この結果、これまでに習得してきたこと、学習してきたことを確認し、54点以下の子どもに関しては、今後の進路をどのようにしていくかを保護者とともに話し合っていくものである。小学校に上がるのか、もう1年プレスクールに通うかの最終の決定責任は保護者に委ねられている。どの専門家が診断しても学習に遅れのある子どもで保護者が1年間のプレスクールの超過を認めない場合には、行政が決定権を持ち、保護者の指導を行うこととなる。しかし、この1年間の遅れに対し、大半の子ども本人と保護者や反応としては、さほど気にする社会ではないという。この背景には、個々の到達状況に合わせた学校の体制と社会認識が定着していることが要因としてあげられる。世界の学力といわれる基礎を築いた元教育大臣ヘイノネン氏が、「教育で大切なのは機会の平等です。その基盤があって初めて世界の頂点に立てる高い水準の人材を育成することができます。教育はいわば投資です。国の競争力に関わる問題なのです」と述べる（Heinonen, 2007）ように、1994年の経済不況以降の国の教育政策とともに、「一人の落ちこぼれもなく、国民全体の教育レベルを上げる」という国民意識の流れがそこにはあった。PISA調査における高い学力水準（平均点）と、学力格差の少なさは、フィンランドのこれら国の政策と社会的な国民意識の流れを背景とした個別に対応した教育成果といえる。また、個別の教育を必要とする理由には、多様な民族が入り混じるフィンランドの環境変化があげられる。ホスマリ公園小学校の子どもたちの国籍は約30ヶ国。これらの子どもたちの中にはフィンランド語をほとんど話せない子どもも多く存在する。これらの子どもたちに対しては、個別のグループを作り、やはりそこで一般的な読み書き能力ができるようになるまで学習を深めていく。これは、小学校に限らず、現在、フィンランド国内の保育所でもフィンランド語の習得への取り組みを行うとともに自国の文化獲得のために園の取り組みとして母国語習得のサポートをする姿勢も見られる（三井, 2008）。

3. 教師の質の高さと教育方法

フィンランドの教師は社会的な地位が高く評価され、国民の目指す憧れの職業として位置づけられている(佐藤, 2007)。ホスマリ公園小学校においても、個々の教師の意識は高く、目の前の子どもや家庭、地域のニーズによって自らの教育の質を向上させながら日々取り組む状況があるという。全国的に様々な教育方法を持ち備え、授業数とその教育システムは幅広い自由度が各地域の学校に保障されている。子どもたちの個々のニーズや社会的インテグレーション、家族へのサポートなど子ども・学校全体に対する教育プランを立てて実施しながら、常に振り返って自己評価をくり返す。校長においては年1回の会議が行われ、各学校の教育プランが発表され、その内容に向けて取り組みが行われる。その取り組み結果に対しては、郡や市の教育部の専門家が外部の評価的な機関として評価する。その評価結果から、今後に向けて3つ努力をしていく必要がある部分が提示され、さらに計画を立てていくことへと繋げている。また、すべての学校では、生徒へのサービス委員会が設置され、校長が委員長となり心理士、ソーシャルワーカー、保健師、教師との会議が週に1~2時間程度行われ、年間ですべての子どもの状態を話し合い、その教育方法について検討している。2010年8月より国の制度として個々の子どものアセスメントシートの記入が義務づけられているが、エスポー市では以前から独自の取り組みとして既に実施していたという。

フィンランドで教師は就職してからも常に自己向上が求められる職業であり、すべての教師に研修が年1回、義務づけられている。教師はこの研修の積み重ねが保障されるとともに、社会全体が教師自身の教育の質を高めていくことを重要視し、そのことに対する意見も活発に交わされるのが現状である。常に、教育方法はそれぞれの裁量に任された教師によって創意工夫され、実施されていく。

ホスマリ公園小学校では、スマートボード(電子黒板の一種でプロジェクターで投影されたPC画面に、指等で直接書き込んだり、操作したりすることが可能な電子黒板とプロジェクターを組み合わせたようなシステム)を導入し、電子教材を教室で使っている(写真9)。この電子教材は教科書と併用して使用され、教科書で学ぶ以上にゲームの感覚を取り入れながら問題に取り組むことができる。特に、算数を学ぶ上でこのような教材を利用した教育方法のあり方は、より楽しく学ぶ機会を提供し、子どもたちの学習効果へと繋がっているとのことであった。さらに、子どもたちの教育教材として人気があり、教科書と連動させていたのが、ぬいぐるみの活用である。教科書内にも描かれたキャラクターのぬいぐるみを教師が活用(写真10)して、楽しみながら問題に取り組む子どもたちは、にこやかな表情であった。さまざまな業者の教科書・教材からよいものを選び出し、提供していくのも教師の役割の一つであった。

教師は一つの教室で20名弱(筆者らが訪問したホスマリ公園小学校では多くても15名弱)



写真9 スマートボードを使用する教師



写真10 教育教材のぬいぐるみを使っての授業

の教室に教師は2～3名。チームティーチングを行い、主担当の教師の他に補助的な教師が1～2名担当しながら、それぞれの役割分担が明確にされ、子どもたちの教育に従事していた。

4. ホスマリ公園保育所の施設見学とフィンランドの保育事情

ホスマリ公園保育所では、120名の子どもたちが在所し、6つのクラスに分かれている。クラスの中には、特別に配慮が必要な子どものグループも存在するが、ここでは一般的な障害を持つ子どもを対象としているわけではなく、主に言語の発達が遅い子どもへの支援を主とした保育を実施している。さらに、必要とされる時のみに、障害を持つ子どものグループを作り、専門で対応する保育者が存在することもある。この障害を持つ子どもへの保育に関しては、病院の検査内容と結果、その指示内容を含めて保育に従事することを大切にしている。完全な暖房設備とともに、雪国ならではの建築構造で外から入室する際に身支度を行う玄関のスペースは広々と設定されている(写真11)。寒さに負けない健康的な体づくりのため、夏の昼寝の洋服はパンツ一枚試着するのみで、寝具に入る。北欧スウェーデンの保育でも同



写真11 保育所の玄関

様に、昼寝の1時間には外に置かれたベビーカーの中で乳児を過ごさせることがある(結城, 2010)など、寒い国ならではの体力強化の一面である。遊びの中でのモノとのかかわりでは、大人と変わらず使い方を学ぶ機会として、幼児期から針を持つ機会も与えられる。保育に向けての姿勢としても子どもの自主性・主体性を尊重し、個々に合わせた支援を行うことを目標としている。

保育者に対する社会的な評価も高く、生涯を通じて働ける仕事としての認識とやりがいのある専門家としての位置づけもある(三井, 2007)。これは日本の認識とはかなりかけ離れた職業の社会的位置づけであると考えられる。

IV. フィンランドの特別支援教育

PISAでの好成績により注目を浴びて以来、フィンランドは「教育先進国」として世界的に注目されるようになった。本稿では、教育の「成功」要因の一つとされている特別支援教育(Ministry of Education, 2008)について、筆者の山本が現地で行ったフィールドワークの経験を交えて紹介する。

1. フィンランドの特別支援教育制度の概要

フィンランドの特別支援教育制度は、大きく分けて二つに分けられる。パートタイムの特別支援教育と、フルタイムの特別支援教育である。

パートタイムの特別支援教育は、軽度の学習障害や適応障害、その他の理由で学習に際し支援が必要な子どもに対して行われる特別支援教育である。この支援を受ける子どもは、主な授業は自分の所属するクラスで受け、支援の必要な特定の科目において別室(もしくは、同室)にて特別支援教師の指導を受ける。この支援を受けるに際し、特に医師の診断などは必要ないため、支援を受ける生徒の層も幅広くなっている。

フルタイムの特別支援教育を受けるにあたっては、心理学、医学、社会福祉のいずれかの分野の専門家の診断と親の了承が必要となる。最終的な判断は生徒の所属する自治体によって行われる。また、子どもには個別のカリキュラムが与えられることになる。このカリキュラムは、従来のカリキュラムを基本とするが、子ども一人ひとりの状況に合わせて作成される。個別のカリキュラムを持っているとはいえ、特別支援教育を受ける子どものうち29%は通常教室に常に所属しているという現状がある。特別支援教育は、通常教室もしくは通常学校の少人数グループにおいて行われる傾向にある。

フィンランド統計局によると、2009年度にフィンランドの基礎教育段階にあった子どものうち、8.5%が特別支援教育を受けている。また、このうちの23%がパートタイムの特別支援教育を受けている⁶⁾。日本の場合義務教育段階で特別支援教育を受けている子どもは、約

1.8%である（特別支援学級、特別支援学校合わせて）。単純な比較はできないが、フィンランドの場合、かなり高い割合で子どもが特別支援教育を受けているといえるだろう。

2. 特別支援の現場から

筆者の山本は、2010年2月から6月までの約5ヵ月間、現地の中学校において主に特別支援教室を対象としたフィールドワークを行った。また、フィールドワーク以外にも、小中学校合計9校（内、小中一貫校を含む）に訪問し、インタビュー・観察調査を行った。（このうちいくつかの調査は、文部科学省科学研究プロジェクトの一貫として行った⁷⁾）

現場の教師や子どもたちと接している中で、特別支援を受けるということがごく自然に受け入れられている、ということ強く実感する。子どもは、自分にはサポートが必要であるということを感じており、教師もそれを確信しながら授業を行っているのである。ある中学校の特別支援学級の教師は、子どもの前で筆者に次のように説明した。

「この生徒たちは、少し学習の進度が遅いのよ。だから、少し簡単な教科書を使って勉強するの。」

支援が必要であることを、教師も子どもも正面から受け止めていることが、この発言から分かるのではないだろうか。パートタイムの特別支援学級を観察すると、授業を受ける子どもは通常学級に居る時に比べてリラックスしていることが分かる。自分のペースで学習を進めても良いところや、アットホームな教室の雰囲気がそうさせるのではないかと考える。また、パートタイムの特別支援教師に、何人かの子どもたちが「来年は、先生のところに授業受けに行っている？」と尋ねる場面に出会ったこともある。フィンランドの特別支援教育は、もはや“特別”なものとして認識されていないのかもしれない。

このような例は一事例にすぎず、一校の観察や先生の発言のみで、特別支援を取り巻く環境の全体を把握することはできない。しかし、フィンランドの学校を訪問する度に、「なぜ、特別支援がこれほどまでに受け入れられているのだろう。」という素朴な疑問を感じざるをえないのである。この問いは、あくまで感覚的なものだが、この問いに対する解答を探すことは今後のフィンランドの教育のみならず、世界の特別支援教育にとっても重要なことの一つであると考えられる。

V. マルミ健康センター内ネウボラ (Malmin neuvola)

ヘルシンキ北部地域に位置するマルミ健康センターは病院に隣接した閑静な場所に存在する。センター入口には季節の花々が咲き、人々が通いやすい雰囲気があった（写真12）。筆者らは、マルミ健康センター内ネウボラの主任ヘレナ＝ミックライネン氏に施設見学とフィンランドの子どもの健康を取り巻く福祉事情についてのインタビューを行った。



写真12 マルミ健康センター入口



写真13 ネウボラのルームが並ぶ廊下

ヘルシンキ市内のネウボラは、東西南北の4つの地域に分かれ、現在、全部で26か所存在し、ここ数年で増加傾向にある。市町村が実施する健康事業で、主に妊産婦と子育て中にある母子の健康と、生まれてくる子どもの生活のトータルサポートを行うため両親の関係を深める支援なども行っている。妊娠に気が付いた母親が3～4ヶ月から3回くらいネウボラに通い、その後病院へ受診、妊娠中には7～12回くらい面談を行う。ネウボラの面談担当者は保健師(Terveysten hoitaja)と呼ばれる専門職で、高校卒業後、2年半で基礎である看護師資格を取得し、その後、専門的教育としてネウボラに関連する教育を一年間受ける。多くの場合は資格取得後、すぐにネウボラに勤めるわけではなく、一般的な看護師経験を経て保健師になるケースが多いという。ネウボラには、この健康保健師の他に心理士、栄養士、言語聴覚士などの専門職も勤務しており、今後の予定として、保健師・医者・心理士・栄養士・言語聴覚士などの専門職が集まり、各種子ども家庭サービスやデイサービス、暴力(虐待)などに対応していく福祉・健康側のトータルサポートシステムを構築していきたいと検討している。

平成22年8月24日現在、マルミ健康センター内ネウボラの利用者数は、子ども2,731名、母親412名で、11名のホイタヤが従事している。センター内には、日本でいう総合病院の診療室のように、多くの各保健師のルームが設置(写真13)され、親子は廊下で自分たちの担当者との面談を待っている。子どもの出産前から6歳までの成長を1人の決まった保健師が担当する。18ヶ月と4歳には定期健康診断が行われる他、子育てのためのハンドブックの配付、予防接種や学校に入るまでの成長過程における育児や発達相談などを担当する。しかし、日本が抱えているような育児不安などの問題はほとんどなく、父親が積極的に育児参加しているので相談し合えることがその理由であろうとのことであった。

一般的な市民のネウボラへの意識は高く、妊娠中の女性全体の約95%が主体性を持って利用している。ヘルシンキ市内ではこれまでのネウボラのあり方を見直し、2010年から2012年にかけては、サービスの統一化と平等、従業員と予算の充実を目指している。

フィンランドでは、妊娠・出産・育児中の社会保障としてネウボラでの対応の他に、育児に必要な用品が詰め込まれた育児パッケージ（540ユーロ相当、または現金140ユーロのどちらかを選択）の支給や出産・親休業制度の充実、休業期間内の経済的支援、3歳までの在宅育児手当、子ども手当等と多くの子どもや家庭に向けての社会保障制度が整っている。

Ⅵ. タンペレ市立中央図書館メツォ（Metso Main Library/Pääkirjasto）

サンポラ図書館（Sampola Library / kirjasto Sampola）

フィンランド図書館利用率は世界の最高記録で、国民は月に一度以上図書館に行き、約20冊以上の本やCDやその他のものを借りているという（Dromberg, 2006）。利用率と比例するようにそのサービス水準も世界一であることが世界の図書館にも認められており、国の図書館に対する政策は1990年までにかかなり力が注がれてきた歴史がある。図書館運営に伴う資料購入費、図書館費などの財政的な部分でも人口総数比で換算すると日本の3～4倍も保障されている（原田, 2008）。職員は、専門の養成機関を経て司書資格（Academic degree）を得た質の高い専門図書館員で正規職員として従事している。このような図書館の環境が子どもたちのPISA学力調査の読解力世界一を支える要因の一つであるといえる。

筆者らが訪問したタンペレ市立中央図書館メツォとサンポラ図書館は、ヘルシンキ駅から特急列車で約一時間の場所のタンペレ市にある。それぞれの図書館の中で、子どもに関わる図書館の工夫や特色を取り上げていくこととする。

1. タンペレ市立中央図書館メツォ 一物語を語る豊かさを育む一

タンペレ市立中央図書館メツォは、タンペレ駅より徒歩20～30分の所に位置し地下にはムーミン谷博物館と石博物館も併設している文化の詰まった建物の構造となっている。図書館内は広く、その入口側に児童のコーナーが設置されている。コーナー内には、成人コーナー



写真14 動物マーク①



写真15 動物マーク②

とは異なり、場所を示すマークとして木造の動物マークが各場所に設置されている(写真14, 15)。また、保育所や小学校同様に、ゲーム感覚で遊びながら学ぶ教育教材も所蔵され(写真16)、声を出して学べるように机やイスもコーナー内に設置されていた。上述したように、フィンランドは多様な民族が入り混じる生活環境があり、本の言語もフィンランド語、スウェーデン語、英語を中心とした多くの言語の本が並ぶ。子どもの読書に対する推進運動には熱心で、図書館の所々に子どもの読書を推進するポスターが貼られていた(写真17)。

この図書館の児童に向けての大きな特徴点として、人形劇を行うことのできるシアタールームがあることと劇に使用するための人形が所蔵されていることが挙げられる(写真18, 19)。シアタールームは広々と設置され、ここに子どもが自由に放課後や休日に入入りし、自分たちで創作しながら演じているという。子どもにとって言語を読む活動だけでなく、言語を表現する活動がこの図書館では生み出されている。フィンランドの重要なソーシャルイノベーションの一つとして、「物語創作法 (Sadutus-menetelmä)」というものがある(Riihela, 2006)。物語を作ることによって、会話文化よりも民主的な人間関係を育てることに様々な



写真16 図書館内の教育教材



写真17 読書推進のポスター



写真18 シアター



写真19 人形

影響を及ぼすという研究結果から、20年以上もフィンランドや他の北欧諸国など多くの国で使われているという。家庭、相談所、保育所、学校、図書館、病院、老人ホーム、展覧会、その他子どもたちのグループなど多くの場で活用されている物語創作法。この方法の一部の形として、タンペレ市立中央図書館メツォでは人形劇を通して、子どもたちの個々の表現力を育むだけでなく、個と個の子どもを繋げるコミュニケーション手段ともなっているのかもしれない。

2. サンボラ図書館 —情報教育の普及と本の世界を楽しむ空間—

サンボラ図書館は、タンペレ市立中央図書館の分館として2003年に設立した図書館である。この図書館の大きな目的は「子どもの学び」と「メディアリテラシー教育」の2点である。サンボラ図書館の調査を実施した大橋（2010）によれば、メディアリテラシー教育において同館で開かれるパソコン教室は（a）小学生以下の子どもを対象としたもの、（b）小学生を対象としたもの、（c）親世代を対象としたもの、（d）高齢者を対象としたもの、（e）全市民を対象としたものの5つに分類されるとしている。特に、子どもを対象としたものについては、幼児に対しワークショップ形式でパソコンのパーツの名前や役割を学んだり、子どもにとって安全に遊べるパソコンゲームを紹介したりしている。小学校の児童については、情報の見分け方といった情報に対する批判的な考え方を養うことの教育を実施している。

また、サンボラ図書館は、「子どもの学び」に目的が置かれるように、その学ぶ空間にも工夫を凝らしている。子どもが読む活動を楽しむ場所として、読む家の空間が館内に設置されているのである（写真20, 21）。子どもたちは好きな本を手に取り、この空間でまるで家にいるかのように落ち着いて本を読み出していくのである。

フィンランドでは子どもと父親が連れ立って図書館に通う姿が所々で目立つ（写真22）。家庭で絵本の読み聞かせをするのは主に父親の役割とする傾向が高く、父親が仕事から帰宅



写真20 館内に設置された本を読む家（空間）



写真21 本を読む家（空間）の内部



写真22 お父さんと一緒に図書館で

すると子どもとともに絵本を手に取り、読み始める。育児への父親と母親の両性が参加する国ならではの光景であるといえる。このように、家庭においても子どもの時期から読書環境が整えられ、家族とともに楽しんでいく。このような生活背景がフィンランドの子どもたちの読解力を育む基礎の一助となっていると考えられる。

Ⅵ. おわりに

今回のフィンランドの教育・福祉・地域への視察訪問は、大変短い期間ではあったが、多くの現場とそこで従事する専門家からフィンランドの子どもを取り巻く社会環境の現状を知る上で重要な点を多く学び得ることができた。この学びを基礎として、今後さらに現地への訪問を重ねながら、フィンランドの福祉と教育の重要点を導き出す研究に取り組み、日本社会との比較を含めながら、その効果的な社会政策と教育・福祉での実施方法を考察していきたい。

謝辞

フィンランドの教育・福祉施設の見学およびインタビューを実施するにあたり、ご協力いただきましたヘルシンキ大学の太田裕太郎氏、各教育・福祉施設の皆様、視察の現場をコーディネートして下さったユハ・ライヒネン氏、タンペレ在住の松井佳奈子氏には多大なるご協力を賜りました。ここに記し、深く感謝申し上げます。

注

- 1) <http://www.helsinki.fi/university/index.html>
- 2) 詳細は、フィンランド学びのデザインホームページ参照のこと。第2回世界の扉を開く「教科書」WSOYpro社 http://www.japandesign.ne.jp/HTM/REPORT/finland_manabi/02/
- 3) フィンランドの育児事情 <http://www.babycom.gr.jp/wf/contents/wfc-s.html>

- 4) 1973年のフィンランドの合計特殊出生率は1.50であったが、2008年には1.85へと回復した（渡辺他 2009）。
- 5) 2010年6月23日 朝日新聞夕刊に記事掲載。
- 6) 特別支援教育を受けている生徒のうち、パートタイムの特別支援教育を受けている生徒もいるので、これらの数値は統合できない。
- 7) 基盤研究A「学力向上策の比較社会学的研究－公正と卓越性の視点から」課題番号：20243037、平成20年～22年度、代表志水宏吉。

引用文献

- 安藤節子（2007）フィンランドにおける保育と子育て支援－保育と家族政策を中心に－ 聖園学園短期大学研究紀要第37号, 25-37.
- 大橋裕太郎（2010）生涯学習としての情報教育を支えるフィンランドの図書館の特徴 メディア教育研究第6巻第2号, 1-13.
- オッリベッカ・ヘイノネン+佐藤学（2007）『オッリベッカ・ヘイノネン「学力世界一」がもたらすもの』NHK出版, 10, 34.
- Kaarina Dromberg（2006）Kirjastot「100 SOSIAALISTA INNOVATIOTA SUOMESTA」.（訳本：イルッカ・タイパレ編著 山田真知子訳『フィンランドを世界一に導いた100の社会改革』公人の友社 2008.）
- Kirsi Lindroos（2006）Lämmin Ja Maksuton Kouluateria「100 SOSIAALISTA INNOVATIOTA SUOMESTA」.（訳本：イルッカ・タイパレ編著 山田真知子訳『フィンランドを世界一に導いた100の社会改革』公人の友社 2008.）
- 正保正恵, 塩崎賢明（2008）子育て世帯のワーク・ライフ・バランス実現と保育施設のあり方に関する研究 保育所保護者の仕事・生活様態の日本・フィンランド比較による施策制度の段階的重点化の考察 日本建築学会計画系論文集第73巻第624号, 325-332.
- 佐藤都也子（2006）『健康な成人女性におけるハンドマッサージの自律神経活動および気分への影響』山梨大学看護学会誌第4巻第2号 pp25-32.
- 原田安啓（2008）フィンランドの公共図書館－PISA学力調査世界一を支える図書館と教育制度－ 奈良大学紀要第37号, 21-37.
- 堀内都喜子（2008）『フィンランドの豊かさメソッド』集英社新書, p122.
- 三井真紀（2008）フィンランドの保育環境に関する一考察（2）－多文化保育プログラム MONIKUから－ 九州ルーテル学院大学 VISIO37号, 81-88.
- 三井真紀（2007）保育所保育指針、幼稚園教育要領における保育者－多文化共生社会フィンランドの保育者像を通して－ 九州ルーテル学院大学 VISIO36号, 81-86.
- Monica Riihelä（2006）Suomalainen Sadutusmenetelmä「100 SOSIAALISTA INNOVATIOTA SUOMESTA」.（訳本：イルッカ・タイパレ編著 山田真知子訳『フィンランドを世界一に導いた100の社会改革』公人の友社 2008.）
- 結城康裕（2010）『これで納得！ 福祉のお金 「公」にかかるお金と「あなた」のお金』ぎょうせい, 177.
- 渡辺久子・トゥーラ・タンミネン編著（2009）『子どもと家族にやさしい社会 フィンランド』明石書店, 132.

The Social Environment around Children in Finland

Mio NAKAMOTO

Fusayo YAMAMOTO

Mikako INAGAKI

Kazuko HATTA

This article reports on the social environment around children in Finland.

We investigated Finland situations of the education, welfare, and the library by interviewing each specialist. As a consequence, we discussed detected differences between Finland and Japan about life style and politics, childcare program, etc.